

科学と評価



巻頭言

Science and evaluation of scientific achievements

村上 富士夫*

Key Words : basic research, impact factor, evaluation

私は脳の発生の仕組みや基本原理の解明を目指して研究を行っています。具体的には神経細胞移動が脳の形態形成にどのようにつながるかを明らかにしたいと思っています。私の研究室で行っている研究は役に立たない基礎研究です。そう言いながら心の底では50年位経てば、きっと人類に役に立つであろうと信じています。勿論そんなことは科学の発展の歴史を一目見れば自明なことです。基礎研究の推進はその国の未来の発展に不可欠です。ところが最近は何故か、“役に立つ”研究ばかりに多くの研究費が注がれるようになりました。今すぐ役に立つ研究は、すなわち近い将来役に立たなくなる研究であることが忘れられているような気がします。大学などにおける人材育成についても同じことが言えます。即戦力となる人材の育成が重要であるかの風潮がありますが、それは直ぐに役に立たなくなる人間を育てよと言っているのに等しいことです。それにも関わらず、直ぐに役に立つ研究への圧力が高まってきた理由の一つは、科学と技術の距離が近くなり基礎研究と思ってやっていた研究があっという間に産業につながるようになってきたことかも知れません。それ自身は悪いことではありませんが、その結果色々な弊害が生まれてきました。そして科学に関して無知でありながら、権力を持っている人たちの声が大きくなってきました。科学と技術の区別さえ出来ない人たちによって、研究の「効率」や「投資効果」

が叫ばれるようになりました。真理の探究が目的であったはずの、科学が“投資”の対象になってしまいました。

このような状況を生み出した責任の一部は研究者にもあります。その一つは安易な方法での研究の「評価」です。最近雑誌のインパクトファクターが研究の評価のために頻繁に使われるようになりました。インパクトファクターはもともと目次速報誌であるCurrent Contentsへの収録雑誌を選定する基準として考えられたものであり、個々の研究の重要性とは直接関係がありません。研究の真の評価は専門家ですれども簡単には出来るものではありません。しかし、評価を数値化してしまえば研究の中味を理解できない人でも、「評価」をおこなうことができるため、大変便利な(=危険な)道具になってしまいました。そして数字が一人歩きするようになってしまいました。一部にこの現状を変えようと言う動きはあるものの、改善はなかなか進みません。

“役に立つ研究”やインパクトファクターの高い雑誌に論文が掲載された研究が余りにも高く評価されるようになってしまって起こった弊害の一つにデータの捏造があります。金儲けやインパクトファクターの高い雑誌への論文の掲載が目的になってしまった人たちにとって、真理などあまり重要ではないのでしょうか。

周りに若い学生がたくさんいる環境に居てわかることの一つは、研究の重要な担い手の多くは純粋な心をもった学生であることです。そして若い学生達を研究に駆り立てるのは好奇心です。彼らは一旦面白いと感じたら、昼夜に関わらず研究に没頭します。科学の発展は「投資」だけでは動かせるものではないことを決して忘れてはならないと思います。



* Fujio MURAKAMI

1948年8月生
大阪大学基礎工学部・生物工学科
(1972年)
現在：大阪大学大学院 生命機能研究科
教授 工学博士 神経科学
TEL：+81-6-6879-4655
FAX：+81-6-6879-4659
E-mail：murakami@fbs.osaka-u.ac.jp